

仲宗根政善さんのこと

霜多, 正次 / SHIMODA, Seiji

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

4

(終了ページ / End Page)

11

(発行年 / Year)

1996-02-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002662>

仲宗根政善さんのこと

霜 多 正 次

仲宗根政善さんは私と同郷（今帰仁村字与那嶺）で、生家も近く、私の家から百メートルと離れていなかった。私が小学校に入った時、政善兄さん（と私はいつていた）は県立の第一中学校に入って、シマを離れて首里に行ってしまったので、日常性的にお会いすることはできなくなったが、それでも政善兄さんは私のあこがれのままとであった。「よく勉強して、政善兄さんのようになれ」、と小学校の教員であった父からたえず督励されたものである。

そのころ沖縄県には、首里と那覇に県立の中学校（五年制）が二つあるだけで、私立中学校はなかった。ヤンバルなどから中学校に入るのは至難で、政善兄さんのように一中に入る人は今帰仁村内から一人か二人、あるいは一人もない年もあった。そんな難関をとっばした中学生達は、夏休みになると霜降りの制服を着て、鼻緒の太い下駄をはき、てぬぐいを腰にぶらせげ、つばの広い麦藁帽子をかぶってシマに帰ってきた。そのころ、洋服を着る人は学校の先生か役場吏員くらいしかいなかったから、その颯爽たる姿がまた私の希望の星であった。政善兄さんの家は部落一番の富農家で、立派な高い石

垣をめぐらしたカーラヤであった。帰郷してきた政善兄さんはそのメーヌヤ（前の屋、離れ）を占拠していたので、私は用もないのに毎日のようにそこを訪ねたものである。

私が政善兄さんのあとをおって首里の一中に入学した時は、彼はもう福岡高等学校に入っていたので、けっきょく私は小学校らしい政善兄さんと日常的に接触する機会はなかったのだ。それでも、彼はたえず私の進学的目標であった。中学三年のとき、政善兄さんは東京帝国大学にすすんだので、私の進学方針もそのとき決まったといえる。父は医学専門学校に就いて医者になることをすすめたが、私の希望を頭から拒否はしなかった。

その後、私が政善兄さんに会ったのは、私が大学に入った年であった。そのとき彼は大学を出て、県立第三中学校（私が一中に入った翌年に名護に設立された）の教師になっていた。私は帰郷した機会に彼の宿舎を訪ねたのだ。そのとき、彼は都落ちせざるえなかった失意をせつせつと語ったものである。大学卒業後も東京にのこって、伊波普猷先生や同僚の服部四郎氏らの協力をえて、琉球語の研究をつづけたいとおもったが、卒業後一年がすぎても職がなく（不況のどん底時代であった）、とうとうあきらめて三中教師の要請に応じたのだという。そして学校は雑用が多く研究がうまくいかないことを嘆いていたのだ。

その後、私が政善さん（兄さんとは言わなくなっていた）に会ったのは戦後になってからである。一九五三年三月、私ははじめて沖縄を訪れることができたが、最初に訪ねたのは政善さんのお宅であっ

た。その著書『沖繩の悲劇』―ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』をいただいたからでもあった。その著書の話しから、政善さんは翌日さっそく「ひめゆりの塔」など、ひめゆり部隊の転戦の跡を案内してくれ、最後は喜屋武岬まで連れて行ってくださった。そのころの南部戦線はめぼしい樹木がなく、部落も民家もなく、「ひめゆりの塔」や「健児の塔」にいく道路のほかは茫茫とした原野になっていた。そこを政善さんは憑かれたように背丈ほどにのびた草をかき分けて進むので、私はへきへきしたものである。とくに海岸のアダンの茂みの中にもぐっていったのには思わず足がすくんでしまった。しかし、そのアダンの茂みとその先の島の果ての断崖が、政善さんにとってどういう場所であるかを私は知っていたので、勇を鼓して彼の後にしたがった。

アダンの葉で手や顔を引っ搔かれながらやっとな茂みを抜けると、断崖のむこうに蒼い海がまぶしかった。凹凸の激しい岩のうえにはあちこち芝草が生えていて、ちょっととした広場などがあり、そこは私が『沖繩の悲劇』を読んで想像していた光景とあまり変わらなかった。(いま「平和の塔」が建っているあたりだったとおもう)

とうじ、アダンのなかに、島の最南端に追いつめられた敗残兵や民間人がひしめいていた。政善さんたちの野戦病院は解散になって、各自自由行動をとるように命ぜられていたが、生徒達は教師と離れるのが不安で、負傷して耳がつんばになっている政善さんのまわりには一三名の生徒がついてきていた。崖下の海からは敵舟艇が繰り返し、海岸づたいに港川に行け、むこうに行ったら水も食料もあ

る」と放送していて、民間人がそれに応じて崖を降りて波打ち際を移動している人達がいたが、その列にむかって発砲する日本兵もいた。「岩の上と船艇とのこのわずかの距離に、敵と味方という嵐のような感情の波が立ち、たやすくこえることはできなかった。泳げばたやすく渡れるこの距離が、千仞の谷よりも深く、人間の心と心をへだてているのである。一体、どうして同じ人間のあいだにこんな障害ができるのか……。私はアダンのかげにひそんでいて、じっとこのこえがたい谷をみつめていた」と政善さんは書いています。

六月二十三日、十一時ごろ「突然、米兵が前方の岩の上にあられた。アダンのかげにいた生徒は小さく寄りあってふるえた。小銃弾はビュービューアダンの中に飛んだ。福地は、

「先生、もう覚悟してもいい時期です」

と私の目をじっと見つめた。この生徒の手には手榴弾が握りしめられていた。

「しばらく待て、今センをぬくんではないぞ。いいか」

と私はきびしく生徒を制しつつ、米兵の動きに目を配った。

「福地、ぬくんではないぞ！しばらく待て！」

と二、三度制した。そのとき、既に米兵は私たちの前方およそ一〇メートルまで接近していた。

そばにいた日本兵はアダンの奥へ入りこんでいった。

「死ぬんではないぞ！」

といいつづけてふり返りふり返り出てゆく私のうしろに、運天祐子と大城静子が青くなつてついて来た。米兵は銃を向けていたが、発砲しそうな姿勢ではなかった。たちまち、三、四〇名の兵士がわれわれを包圍してしまつた」

「だいたいこの付近だつたと思う」と政善さんは足で岩を踏みつけながらそのときの状況を説明したが、とうじの集団的狂気から覚めた一知識人の毅然とした行動が、一三名の生徒と、その他多数の日本兵の生命を救うことになつたのだつた。この断崖の情景は、いまでも私の脳裏に焼きついて離れないのだが、それと同時にいまひとつ、自分が経験したことでもないのに、私の想像を刺激してやまない情景があつた。

六月二十二日のことである。その晩は月が明るいので、生徒達はあと一日か二日分しか残っていない米を炊いて、アダンから抜け出して岩の上で晚餐をした。放送をつづけていた船艇もどこかに去り、摩文仁岳への砲撃も止んで、頭に包帯をまいた傷病兵がひとり岩の上にてきて、ぼんやり海を眺めていた。その日は、五百メートルも離れていない崖下の岩穴で、平良松四郎教師と十二名の生徒が自決していたが、政善さん達はそれは知らなかつた。

「誰かが歌いだした。生徒達はまだ皇国の必勝を信じていた。『海ゆかば』を歌つた。『勝利の日まで』も歌つた。『別れの曲』も歌つた。其枝さん歌つてちょうだい、と誰かがせがむと、田場はすなおに独唱した。それは美しい死の世界を夢見ているかのようなでもあつた。例の通州事件で父を虐殺

され、母と二人で沖縄に帰ってきた田場其枝の身の上が哀れでならなかった」と政善さんは書いている。その田場其枝は、実はいま東京で私の家に同居しているのだった。彼女は私のいとこの松田定雄と結婚して、青山学院大学に留学している彼と生まれたばかりの子供と三人で私の家の隅のほうに小屋を建てて住んでいるのだった。そのいとも、日本軍の現役兵として摩文仁まで追いつめられ、単身「国頭突破！」を果たして実家にたどりつくことができたということ、私は彼と其枝さんから沖縄戦の惨状をよく聞いていたのだった。だから、声のいい其枝さんが、『海ゆかば』を独唱したという岩の上に立った時、私には政善さんとはまた別の感慨があつたのである。

私は、こうして一日がかりで南部戦跡を詳しく案内してもらつたあとも、なお数日政善さんの家でお世話になることになった。とうじは沖縄に日本円をもちこむことができず、郷土での滞在費も身元引受人に頼るしかなかったから、私は叔父に身元引受人になつてもらつて、親戚や友人の家を転々と居候して歩かなければならなかった。政善さんはころよく私を泊めてくれて、その間、戦争とその後の変わり果てた郷土のようすをいろいろと話してくれたのだった。なかでも印象づよく記憶しているのは、米軍政府のもとで教科書編纂の仕事させられたという話であつた。

とうじ民家も学校もほとんどが破壊されて、子供たちは教科書も文房具もなにもなく、ただ腹をすかせて米軍施設の周辺をうろろろしていた。そんな子供たちを一カ所にあつめておくための学校がつくられたが、先生も足りず、『青空教室』で歌を歌つたり遊戯をしたりしてあそばせるのが精一杯であつ

た。そんな子供たちに教科書をつくって勉強させようというのが米軍の意向であった。

教科書をつくるといっても紙も印刷機もなく、見本となる教科書が一冊も残っていないので、政善さんたちは困惑したが、あまれたことに教科書は琉球語で書けということであった。琉球語といっても、近代語として標準化されているわけではなく、離島ごとに、あるいは部落ごとに話し言葉はちがっている。それで教科書を書くなどと言うのは非常識である。政善さんたちがそう説明して、教科書は国語（＝日本語）で書くしかないというと、沖繩は日本ではない、と係官はマッカーサー元帥の言葉を引いて、いきりたつてまくしたてるのだった。沖繩を日本から切り離すという米軍の方針は確固としていて、政善さんたちの意見はなかなか通らなかつた。議論してもラチがあかないので、けっきょく世論を動員して琉球語の教科書がいかに非現実的かを納得させたのだった。

かくして小学生用の日本語教科書ができたが、それは“ごくごく”でなく“ぶんがく”という表題に変えられた。藁半紙をホッチキスでとめた薄っぺらなガリ版刷りの教科書が少部数子供たちにくばられることになった。

政善さんは家族が幸いみな無事だったので、田舎でしばらく蟄居しようとおもっていたが、そんなのんきなことは許されず、米軍政府に駆り出されてそういうやりきれない仕事をやらされたのだった。しかし生きるためにそんな仕事をつづけているうちに、米軍人の尊大な態度や、それにおもねる同胞の卑屈さと権力にすりよる腹黒い葛藤などに巻き込まれていく自分が情けなくなつて、数年後にはそ

ういう世界を抜け出した。そして私が政善さんを訪ねたときは、琉球大学の図書館長をしていたのだ。そんな政善さんの家にお世話になっていくうちに、私は戦争とその後の沖縄の惨めな現実を生き、た誠実な知識人の典型をみるおもしろいがあったのだ。